

A 語句の意味と読み

(1) まだ夜が明けきらないうちに。夜の深いうちに。／「こむ」は「(夜が) まだ深いうちに事を行う」意。人目を忍んでのお出ましなので、夜明け前に出発している

(2) 読み=ごかう(現代仮名遣いでは「ごこう」)／意味=上皇・法皇・女院などのお出かけ。天皇の場合は「行幸(ぎやうがう/ぎょうこう)」といって読み分ける。／★「御幸」と「行幸」の読み分けは頻出。ここは法皇なので「御幸」

(3) (〜かと) 見まちがえられる。見まちがえるほどである。／動詞「あやまつ(=まちがえる)」+自発の助動詞「る」。「〜かとあやまたる」で「〜かと見まちがえるほどだ」

(4) 墨で染めた黒っぽい衣。僧や尼が着る、出家した人の衣。／「こき(濃き)」はその色が濃いこと。女院たちがすでに出家した身であることを示している

(5) 〜しかねる。〜するのに難儀する。ここは「下りかねる・下りるのに難儀する」の意。／動詞の連用形+「わづらふ」で「〜しにくい・〜しかねる」。険しい岩道なので下りるのに苦労している

(6) 読み=はながたみ／意味=花を入れるかご。花籠。／「かたみ」は竹などで編んだかご。摘んだ花を入れて持ち帰るためのもの

B 文法

(7) 願望(希望)の助動詞で「〜たい」の意。「まほしう」は連用形「まほしく」がウ音便になった形。／下の「思し召さ(れ)」に続くので連用形。「ご覧になりたいとお思になる」となる

(8) 「まだ〜ない」。副詞「いまだ」が下の打消の助動詞「ず」と呼応している。ここは「(寒さの名残が) まだ消えきらない」の意。／漢文の再読文字「未(いまだ〜ず)」と同じ言い方

(9) 強意(強調)の係助詞。結びの語=「なる」で、活用形は連体形。／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。四段活用動詞は終止形と連体形が同じ形なので、「ぞ」があることを手がかりに連体形と答える

(10) 完了の助動詞「ぬ」の連体形。疑問を表す文末の「ぞ」は連体形に接続するので、「ぬ」が連体形「ぬる」になっている。(この「ぞ」は疑問語「いづく」とともに疑問を表す。文末の「ぞ」を終助詞と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。終助詞と見る教科書では、疑問語「いづく」を受けて連体形で結んでいる、と説明する。)／「いづく」=どこ。「どこへお出かけになったのか」と尋ねている。「ぞ」が文の途中にあって文末を連体形で結ぶ、ふつうの係り結びとは形がちがう

(11) 過去の助動詞「けり」の終止形。「〜た」と訳す。／地の文の「けり」は過去。和歌の中の「けり」は詠嘆になることが多い、と区別しておく

(12) 推量・意志の助動詞「むず」(「むとす」の縮まった形)の終止形に、現在推量の助動詞「らむ」がついた形。あわせて「〜だろう」と推量を表す。ここは下の「恥づかしさ」にかか

る連体形で、「〜することになるような(〜するのであろう)」と婉曲・推量を表す。中世の物語や軍記でよく使われる言い方。／「んずらん」とも書く。「(法皇に) お見せ申し上げることになるのだらう(恥づかしさよ)」と、下の名詞にかけて読む

C 主語・指す内容・敬意の方向

(13) 「御覧ず」=「見る」の尊敬語、「思し召す」=「思ふ」の尊敬語(「思す」よりさらに敬意が高い言い方で、天皇・上皇級の人に用いる)。どちらも動作主である後白河法皇に対する、作者(語り手)からの敬意。(教科書によっては「思し召す」を「最高敬語」と呼ぶこともあるが、⑭の「せ給ふ」のような二重敬語とは別のもので、お使いの教科書の用語に合わせる。)／地の文の敬語は作者からの敬意。敬語がついている動作の主が法皇だとわかる

(14) 謙譲語(「言ふ」の謙譲語)。返事を申し上げる相手である後白河法皇への敬意(作者から法皇へ)。／呼びかけたのは法皇。「申す」は動作の受け手(言われる相手)を高める

(15) 「御幸」は女院(建礼門院)の動作。この言葉を使ったのは後白河法皇。手がかりは受けの「と仰せければ」で、「仰す」は「言ふ」の尊敬語だから、この場面で最も高い人物である法皇の動作だとわかる。／★同じ「御幸」でも④は法皇のお出まし、⑨は女院のお出かけ。取りちがえやすい

(16) 丁寧語(「あり・をり」の丁寧語で、ここは補助動詞的に「〜ております」)。話し手である老尼(阿波内侍)から、聞き手である後白河法皇への敬意。／会話文の敬語は話し手からの敬意。丁寧語は聞き手への敬意。なお同じ傍線の「いらせ給ひ」は尊敬語で、女院への敬意

(17) 女院(建礼門院)への敬意(話し手である老尼から女院へ)。尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」に、尊敬の補助動詞「給ふ」を重ねた二重敬語(最高敬語)で、とくに高貴な人物に用いる。／「わたる」は「行く・来る・あり」の尊敬語で「いらっしゃる」。「〜せ給ふ」の形を見たら二重敬語を疑う

D 口語訳

(18) 建礼門院が大原で静かに暮らしておられるお住まいを、ご覧になりたいとお思になったけれども。／「閑居」=世を離れて静かに暮らすこと・その住まい。「まほし」=〜たい

(19) 屋根の瓦が破れているので、(入りこむ)霧が絶え間なく香の代わりとなって香をたき、扉が落ちているので、(差しこむ)月の光が常にもる灯明となって灯をかがけている。(「霧が絶え間なく香のようであり、月の光がいつもともる灯明のようである」と、見立ての形にまとめて訳す本もある。)／「不断」=絶え間ない、「常住」=いつも変わらずある。荒れた庵を仏堂に見立てた対句。霧・月が主語、「たき」「かかぐ」が述語なので、この二語を訳し落とさない

(20) ここにおられた女院は、どこへお出かけになったのか。／「これ」はここでは場所をさして「ここ」。法皇が老尼に尋ねた言葉

(21) (あの方が)女院でいらっしゃいます。／「わたる」=いらっしゃる。「さぶらふ」=〜ございます・〜ます(丁寧)

E 内容・記述

(22) 如月・弥生（旧暦二月・三月）のころは風が激しく、寒さの名残もまだ消えきらなかったから。そのため、春が過ぎて北祭（賀茂祭）も終わったころに出発した。／「けれども」の後ろ（風はげしく、余寒もいまだつきず）が行けなかった理由。実際に出発したのは、さらに後の「北祭も過ぎしかば」のところ

(23) 対句。破れた屋根から入りこむ霧を絶えずたく香に、落ちた扉から差しこむ月の光を常にとる灯明に見立て、荒れはてた庵室を、かえて仏道にふさわしいけだかい場として美しく描いている。（漢詩文の調子を取り入れた、和漢混淆文らしい一節。）／★「荒れている」だけで終わらせない。「荒れているのに（＝荒れているからこそ）香と灯明のある仏の道場のようだ」まで書く

(24) かつて宮中で栄華をきわめた高貴な女院が、いまは山に分け入って自ら花を摘んで暮らしているという落差を表している。平家一門の栄華と滅亡、盛者必衰のあわれが、この一人の姿に集まっている。／花籠を自分の肘にかけて運んでいる点に注目。本来なら人にさせる仕事を自分でしている

(25) 尼となって落ちぶれた今のありさまを、かつての宮中を知る法皇にお見せすることになるのだ、という深い恥じらいと嘆き。／相手は最高位の法皇。昔の自分を知る人に今の姿を見られることのつらさ

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 平家一門の栄華と滅亡を描いた軍記物語。鎌倉時代に成立し、琵琶法師の語り（平曲）によって広く伝えられた。この場面は、最終巻の「灌頂巻（かんじょうのまき）」に収められている。／灌頂巻は「女院出家」「大原入」「大原御幸」「六道之沙汰」「女院死去」からなる、生き残った建礼門院の後日談

(27) 建礼門院徳子。平清盛の娘で、高倉天皇の中宮、安徳天皇の母。壇ノ浦の戦いで一門と安徳天皇を失ったのち出家し、大原の寂光院でひっそりと暮らしていた。／★「女院」＝建礼門院、「法皇」＝後白河法皇。法皇は女院の夫であった高倉天皇の父にあたる

(28) 「諸行無常」と「盛者必衰」。この世のすべてのものは移り変わってとどまらない（諸行無常）、勢いの盛んな者も必ず衰える（盛者必衰）という無常観。冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に示され、「大原御幸」もこの見方の上に描かれている。／栄華をきわめた女院の今の姿が、そのまま盛者必衰の実例になっている

【現代語訳（全文）】

こうしているうちに、文治二年の春のころ、後白河法皇は、建礼門院が大原で静かに暮らしておられるお住まいを、ご覧になりたいとお思いになったけれども、二月・三月のころは風が激しく、寒さの名残もまだ消えきらない。（中略）北祭（賀茂祭）も過ぎたので、法皇は、まだ夜が明けきらないうちに、大原の奥へとお出ましになる。

庭には夏草が一面に生い茂り、青柳の枝が糸のように乱れ、池の浮き草が波にただよって、錦をさらしているのかと見まちがえるほどである。（中略）屋根の瓦が破れているので、（入りこむ）霧が絶え間なくたく香の代わりとなって香をたぎ、扉が落ちているので、（差しこむ）月の光が常にとる灯明となって灯をかかげている。

法皇が「誰かいるか、誰かいるか」とお呼びになったけれども、お返事を申し上げる者もない。しばらくして、年老いて衰えた尼が一人参上した。法皇が「ここにおられた女院は、どこへお出かけになったのか」とおっしゃったので、（尼は）「この上の山へ、花を摘みにおいでになっております」と申し上げた。

上の山から、濃い墨染めの衣を着た尼が二人、岩づたいの険しい道を伝いながら、下りかねて難儀しておられた。（中略）（老尼は）「花籠を肘にかけ、岩つつじを取り添えてお持ちになっているのが、女院でいらっしゃいます」と申し上げた。女院は、「このようなありさまを（法皇に）お見せ申し上げることになるのだろう、その恥ずかしさよ」と言って。